

■録音データ

1977年7月13日 Recorded: San Francisco, U.S.A.  
Herbie Hancock(p), Ron Carter(b), Tony Williams(ds)

この曲は、ハービー・ハンコックがV.S.O.P.クインテットの全米ツアー中にサンフランシスコに於いて、Ron Carter(b), Tony Williams(ds)のリズムセクショントリオのみで行った、“The

Herbie Hancock Trio '77”というアルバムの1曲目に収録されている曲である。

■楽曲構造、主題とその和声進行考察

《Chord Changes》

【A】  
| D7 sus4 | D7 sus4 | Am7 Gm7 | Am7 Cm7 |  
| Bm7 | Bm7 | C#m7 | F#m7 |

【A】  
| D7 sus4 | D7 sus4 | Am7 Gm7 | Am7 Cm |  
| Bm7 | Bm7 | C#m7 | F#m7 |

【B】  
Ebm7	Ab7 sus		Ebm7	Ab7 sus4
B7 sus4	B7 sus4	B7 sus4	B7 sus4	
Fm7	Bb7	EbΔ7	Cm7	
Fm7	Bb7	Cm7	Cm7	

【C】  
Em69 on B	Em69 on B	Em69 on B	Em69 on B
Db on B	Db on B	Eb on B	Eb on B
Em69 on B	Em69 on B	Em69 on B	Em69 on B
Db on B	Db on B	Eb on B	Eb on B

【D】 Chord Changes for Improvisation  
| Am7 Gm7 | Am7 Cm7 | Am7 Gm7 | Am7 Cm7 |

■楽曲の展開とその考察

楽曲フォームは、A-A-B-C 形式(8-8-16-16) TOTAL 48 小節を1コーラスとする曲であるが、インプロヴィゼーションには【D】部分がオープンで使用され、ソリストの合図で、【B】-【B】-【C】の後に再び【D】部分でオープンソロという流れをとっている。このやり方に関しては、ハービー(pf)、Ron Carter(b)共に共通のフォームである。

ハービーは Tony Williams(ds)の奏でる重厚なロックビートの

上で、×2 クルー自由奔放なソロを展開している。A-Minor をトータルセンター(基音和声)にしながら、左に行ったり、右に行ったり、上に行ったり、下に行ったりと、実に遠近感のあるワイルドな内容の演奏である。【A】部分を Interlude(導入部)として使い、次ソリスト(ロン)へとバトンを渡す。ロンのソロが終わると、主題テーマに戻るのだが、ハービーは、かなりアブストラクtnな趣で主題テーマをプレイしている。その後、まるで

活火山の噴火のようなトニーのドラム・ソロへ突入、圧巻である！素晴らしい！トニーに触発されて再びハービーがエンディングに昇りつめる為のインプロヴィゼーションを展開し、次第にフィナーレへとなだれ込んでゆく。一実に野性的で、ワイルドな演奏、パッションもエモーションも十分に伝わってくる演奏なのだが、、、個々のプレイヤーがいささか粗雑な演奏しており、各所にアンサンブルとしては不揃い(?)の箇所がいくつかあるのも確かである。日本人ミュージシャンだと、こういう粗

雑な感じのテイクは決して CD 作品に採用しようとはせず、別テイクで改善を—などと考える人が多いのだが、ハービー、ロン、トニーの“super trio”だと、そういう細かいことは、さほど重用視していないようにも思える。パッションとエモーションのあるソロ内容と、エナジーが落ちずにドラマチックなインターブレイ(ダイアログ)が持続出来ている演奏テイクだから、“OK! これを採用、アルバムの1曲目にしよう!”なんてことになるのだから、その確信感は凄いなあへと感じてしまう。

■ハービー・ハンコックの稀少な“Piano Trio”作品

ハービーは自身の軌跡の中で、“Piano Trio”作品をあまり多くは製作しなかったピアニストである。このアルバムの約4年後に全く同じメンバーで録音された、“Herbie Hancock Trio '81”と並んで、本作はハービーの稀少なピアノ・トリオ・アルバムだと私は感じている。('78年録音の「1+3」は、Ron Carter 名義なので)実質的には、ハービーが現在(2009年)

迄に残したピアノ・トリオ・アルバムは、本作と上記と合せてたったの2作品のみだということは、(現実あまり知られていない)意外な事実なのである。

世界最高峰のジャズピアニストでありながら、これほどまでにピアノ・トリオの作品が少ないピアニストはおそらく、ハービー・ハンコックだけではないかと思う。

■V.S.O.P.Quintet 発 Super Piano Trio そして、、、

ジャズの歴史をさかのぼって見ても、1970年代後期〜1980年代中期は、コアなストレートジャズが殆どビジネスになりにくかったという時代である。聴衆のコアジャズへの無関心—そういった低迷の時代に、ハービーの存在や V.S.O.P.Quintet の磁力に惹かれ、聴衆が(Jazz Fusion Music への支持ではなく)、再びコアジャズを再評価することにつながっていったのである。これはジャズの歴史上、たいへん貴重なトランジション(変換期)であったことは忘れてはならない。私の定義したい、SuperPianoTrio とは、、、単なる古典的ピアノ・トリオの表現手

法に終始するのではなく、1967年にピークに達した Miles Davis Quintet に代表されるコアジャズのジャズイデオロム、それを継承した 1970年代最高のジャズコンボ = V.S.O.P.Quintet、そしてその後にハービーが残した(同一リズムセクションによる)ピアノ・トリオなのである。そしてこの SuperPianoTrio が残した2作品アルバム、、、こうしたムーヴメントは、後の Wynton Marsalis(tp)を迎えて結成される、V.S.O.P.#2 へと真っすぐにつながってゆくのである。

I Thought It was You 楽曲解説

by 田中 裕士(Pianist)

収録アルバム:Herbie Hancock / Sunlight

Recorded: 1977~1978

Musicians

Herbie Hancock(Keyboards, Vocal), Wah Wah Watson(Guitar), Ray Parker Jr.(Guitar), Byron Miller (Electric Bass), Leon Chancler (Drums), Paul Rekow (Percussion) etc.

【“Sunlight” - アルバム(作品)考察】

1978年にリリースされたこのアルバム“Sunlight”発売当時、弱冠15歳のピアノ少年であった私は、父からお小遣いを貰って LP 盤を買いに行ったのだが、この“I Thought It was You”とB面(当時はLP盤)ラストに収録されていた曲“Good Question”という2曲に感性を驚嘆みにされ、何十回と聴き入

ったという懐かしい思い出がある。

巨匠@ハービー・ハンコック...彼は新しいもの好きで、常に音楽的独創性に満ち溢れ、ミュージックテクノロジー分野に於いても常に遠見性と応用力を持ち続けてきた。そんな彼が当時存在していた最先端スペックを誇った各種電子楽器(キ

ーボード類)をフルに使いこなし、見事な創作と演奏を行っている。(CD ジャケット裏の使用機材セッティング写真を参照されたい)

国内外を問わず多くの有名キーボード奏者は、電子楽器や音響・レコーディング機材におけるテクノロジーの進化と共に自身の音楽的構想を進化させ、表現の可能性をも拡大させてきた。頭脳明晰で、飛び抜けた達見性を持ったハンコック

## 【楽曲の構造と特徴について】

今回取り上げるこの曲は、本アルバムからの1曲目オープニングトラックである。1973年の大ヒット作“Head Hunters”で幕けされた、ハンコック自身のオークランド・ファンク(※注1)への憧憬—そのグルーヴィーリズムの上にキャッチーかつポップなメロディラインを巧みに融合させる。そして隠し味として

【Intro】 16 小節

【A】 23 小節

key of A b

Key of B b - A b

- B

【B】 20 小節

Key of D

～ 【C】 Improvisation (Key of A b)

・・・という3部構成から成り立つ主題部は計4回の転調を経て、【C】のインプロヴィゼーション部へと発展してゆく。ここでは、Fender Rhodes Piano(※注2)による洒落なソロが大きくフューチャーされている。

押し付けがましくなく、しかしティスターで、程よくファンキーで・・・センスが心憎い限りである。その後、主題【A】部に戻り、エンディング部は再び【Intro】部(Key of A b)でヴォコーダー(※注3)のインプロヴィゼーションが展開されてゆく。

まるで「新しい玩具を手に入れた子供が嬉しくてどうにも止ま

## 【Black Funk 発 ～ Fusion 経由 ～その先へ】

ハンコックが1973年～1983年までの10年間で発表した“ブラック・ファンクからの進化”を主眼にしたアルバムは12枚だと私はカウントしているが(今回の作品は6作目に当たる)、この創作意欲とバイタリティは凄まじいと思う。年に1枚以上を制作というハイペースである。

毎年毎年、新しい自分で常に前進をという彼の力強い生命力は全ての彼のアルバムからも音楽で感じ取ることができるが、そんな彼の音楽的軌跡を探求解析してみると、彼自身の音楽的進化・進展、人間の挑戦・革命を垣間見ることが出来る非常に興味深い。

黒人ジャズピアニストとして出発し、マイルス・デイビス(tp)の大薫陶を受けながら時代の流れとともに進化した彼の音楽に接し、当時の何人かのジャズ評論家が『ブラック・ファンクを経て、フュージョンに到達しようとしているように見受けられ

が1973年の“Head Hunters”発表から5年の歳月を経て制作した

このアルバムは、ファンク～ブラックコンテンポラリー、そしてジャズ・ミュージシャンとしての彼の壮大なる音楽的構想と勝利の実証を記録した、ジャズ史上大変意義深きヒットアルバムの1枚であると私は感じている。

ジャズ特有のハイブリッドなハーモニー感をさりげなく織りばめ、(音楽自体が単調なメロームードに終始することなく)テキストを引き締めるといった彼独自の音楽的アイデア・センスに基づき作曲～演奏された名曲名演だと言えよう。楽曲主題部の構造概要は下記の通りである。

らない」といった感の無邪気さを感じる。が、、、(ハンコックに対して深い愛敬心を抱く私ですら)いささかくどい反復展開のエンディングにも感じてしまう。

当時としては非常に斬新ユニークな新機材であったことを思慮して、そのへんの所感は30年という歳月が経った今、あえて寛容な笑顔で理解したい。

る。ハンコックはジャズを捨て商業音楽家と化した』—などというレビューを書いていたことも事実である。

しかしそれは、おおよそ浅薄な愚見であったと私は思う。今回取り上げた「Sunlight」という作品の後1978年に、ハンコックは親友チック・コリア(pf)とのピアノデュオアルバムを2枚製作し、同年に東京信濃町 SONY のスタジオでソロピアノ作品「The Piano」までも録音している。

その後再び、「Sunlight」の延長上の構想としての、「Feets Don't Fail Me Now」, 「Monster」といったアルバムへと彼の仕事はさらに進展してゆくのである。

ハンコック自身が某音楽雑誌のインタビューで話してくれた時、『私が今、主眼としているのは、ポップオーディエンス向けのダンスミュージックであって、ジャズオーディエンス向けのシリアスな音楽ではない。何故ならば、私はジャズ・ミュージシ

ャンである以前に“音楽家”だからだ』—と答えていたことがあった。

私は自分自身ピアニスト/キーボード奏者として、彼の理念～そして想い描いていたことを、手を取るように理解できる。ハンコックがインタビューに対して回答した想いは、実に気取りのない純朴かつ実直で誠実な提言であったと私は信じている。

しかし、その一方で彼は愚見レビューを書いたジャズ評論家を嘲笑するが如く、この頃(1977～1979年)に(こういった前述

## 【1973～1978年@ハンコックが果たした音楽的使命と軌跡】

今回取り上げた楽曲では(近年殆ど使用されることがなくなってしまうが)ヴォコーダーをユニークに使いながら、ハンコック自らがキャッチーでメロなメロディを歌うといった新アイデアに挑んでいる。彼の歌唱力について、その良し悪しなどを論述すべき紙面ではないので、レビューは差控えたい。・・・そんなことよりもっと大切なことは、彼自身が単なるプリミティブなジャズピアニストなどという小さなカテゴリーに収まりきるような音楽家ではなく、彼の魂の奥底に深く根ざした、Blues そして Jazz をその時代時代に根ざした最新のテクノロジーを駆使し、それを音楽としていかに進化～洗練熟成させてきたのか・・・という軌跡。さらにはファンク、ブラックコンテンポラリーミュージックとしての命題、そして音楽的使命をどのような方法で彼自身が全うさせてきたのかという2点の

の仕事と並行しながら)衝撃のハードコアジャズクインテット@V.S.O.P. Quintet でも何枚ものアルバム作品を世に送り出しているのだ。彼の多彩な才能、そして絶え間のない挑戦心に対して驚愕を隠せないのは私だけではなからう。【この“V.S.O.P. Quintet”の音楽的考察については、改めて別号掲載させていただく予定です】

ポイントに尽きるのではないかと私は考える。ジャズという領域を越え、より広い意味でのブラックミュージックファン層に対して、ハイクオリティ、ハイセンス、かつキャッチーな音楽を発信してきたことにより、ダンスミュージックチャートの上位にランクインされ続けたという実証をも示したのだ。その結果、ハンコックはジャズミュージックの持つ可能性・・・つまりグローバルなインターナショナルアートフォームとしての音楽表現パレットをさらに拡大するという快挙を成し遂げたのである。

この功績がどれほどまでに価値の高いことなのか、そして広範多岐に渡るミュージシャン達に向けてどれほどの影響と勇気を与えたのかということは、彼自身が受賞したグラミー賞の数々が物語る、比類なきジャズ史上の偉大なるトピックなのである。

(※注1)オークランド・ファンク・・・サンフランシスコ湾東岸に広がるエリアで70年代、黒人街があって、リズム&ブルースやアーバンブルースの温床になってきた。そうした伝統の中から、“Sly & Family Stone”, “Tower of Power”といった強烈なファンクバンドが出現した。このオークランドにはジャズ、ロックのクラブが多数存在し、若手ミュージシャンが中心になって地域独特の強烈なサウンドを創るムーヴメントが1970年代当時あった。そのような音楽的スタイルを、『オークランド・ファンク』と呼ぶ。

(※注2)Fender Rhodes Piano・・・1960年代後半から1980年代にかけ、ロック、ジャズ、ソウル、フュージョン等の数々のトップアーティストに愛用され、多くの名演や名盤にその名を刻み続けてきた米国製エレクトリックピアノの名器。1990年以降は製造中止となっていたが、2009年に改良復刻された。

(※注3)ヴォコーダー・・・【英】vocoder 電子楽器@シンセサイザーの一種。ヴォイス(voice)とエンコーダー(encoder)を合わせた言葉。音声圧縮技術の一種で、人声をシンセサイザーで解析し、機械的に合成し直して音を鳴らす技術のこと。元々は軍事システムなどで非常に低いビットレートをを用いる場合に採用されていたのがルーツで1976年頃に電子楽器技術として応用されリリースされた。